



TITLE:

『メディナ憲章』に関する若干の 考察

AUTHOR(S):

後藤, 晃

CITATION:

後藤, 晃. 『メディナ憲章』に関する若干の考察. 東洋史研究 1977, 36(2): 183-207

ISSUE DATE:

1977-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/153659>

RIGHT:

東洋史研究

第三十六卷 第二號 昭和五十二年九月 發行

『メディナ憲章』に關する若干の考察

I

後 藤 晃

イスラムの預言者マホメットが、西暦六二二年にメッカからメディナに移住（ヒジュラ）した際、メディナの人々と交した契約文書がある。『メディナ憲章』と一般に呼ばれている。この文書は原初期のイスラム『教國國家』の性格を知るための重要な史料として近年のイスラム學研究者が採りあげてきた。筆者は、後に詳しく論じるように、この文書は主として次の三つの部分よりなると考えている。その一つはムハージールン（メッカよりメディナに移住した人々）とアンサール（メディナのイスラム教徒）の各集團間にあつた血の貸借および捕虜の身代金の清算に關すること。もう一つはアンサールに從屬しているユダヤ教徒に關する規定。もう一つがこの「憲章の民」に關する規定である。

「文書」といっても實際の文書が今日に残されているわけではない。それはイブン・ヒシャーム（二二八年没。以後生没年はすべてイスラム曆で記す）が注を付して編纂したイブン・ハーク（一一五一年没）著『預言者の傳記』に採録されている。^①この文書の信憑性と成立時期について議論がある。その信憑性に關しては、タバリーをはじめ權威ある歴史家や傳承學者

の著作に文書のテキストが採録されていないにもかかわらず、近年のイスラム学者はそれを疑っていない。成立時期について、W・M・ワットが、従来の議論を整理したうえで、イブン・ハークの書にある文書のテキストは日付けの異なるいくつかの文書を合成したものではないか、と示唆した。^⑧ R・B・サージェントは、この文書の従来のヨーロッパ語訳はすべて不正確であると断言し、さらに南アラビアでの實地調査で得られた現在の部族間の契約とこの文書とが形式と言葉の點で著しく似ていることを指摘し、この文書は八つの一連の文書を合せたものであると推定した。^⑨ サージェントはロンドン大學のアジア・アフリカ研究學院でチームを組んでこの文書を検討しているという。が、その成果は未だ聞かない。いわば豫備的考察であるサージェントの論文は、しかし、示唆に富む。

『メディナ憲章』がイブン・ハークの書以外の書物にも採録されていることを指摘したのは嶋田襄平教授である。^⑩ 傳承學者アブ・ワイド(二四四年没)著『金の書』にイスナード(傳承の経路)を明示して載せてある。イブン・ハークの伝えるテキストをA、アブ・ワイドの伝えるテキストをBとしよう。テキストAとテキストBは本質的には同じである、と嶋田教授は断じた。しかし、テキストBはAにある條項のうち、本質的ではない部分ではあるが、まとまった條項を缺いている。このことは「文書」が合成されたものであることを暗示している。

トルコ人でフランス在住のイスラム學者M・ハミドゥッラーはマホメットと正統カリフ時代の政治・外交文書を諸本から抜き校訂した。^⑪ むろん、『メディナ憲章』もそこに含まれている。ハミドゥッラーはイブン・ハークとアブ・ワイドがそれぞれ傳えたテキストに加えてイブン・ザンジュ・ヤフ(二四八年没)が傳えたテキストを對照し、テキストを校訂している。イブン・ザンジュ・ヤフの傳えたテキストをCとしよう。後に述べるようにBとCは同系統のものである。

従来の研究からワット、サージェントの研究に至るまで、みなテキストAだけで『メディナ憲章』を論じてきた。テキストBの存在を指摘した嶋田教授も、テキストBおよびCの存在を指摘したハミドゥッラーも特に新たな問題提起をおこなっていない。本稿は、A・B・Cの三つのテキストを對照したハミドゥッラーのテキストを利用して、従来の『メディ

ナ憲章』研究に若干のことを加えんとする試みである。ただ、サージェントが指摘するように、この文書の本格的な検討には當時の慣習法に關するより精度の高い知識と、イスラム前の時代の碑文・詩・傳承にある言葉と概念のより詳細な研究が必要である。^⑧ 本稿は、サージェントの論文と同じく、豫備的な考察に過ぎない。

なお本稿ではテキストの全文の譯は試みない。ワットの英譯を参照していただきたい。本稿では『テキスト』の節番號はワットのそれに合せた。

II

イスラムの傳承は、原則として、イスナード（傳承の經路）とマトン（傳承の内容）よりなる。しかるに、テキストAはそのイスナードを傳えない。テキストBのイスナードは、その古い順に、以下である。①ズフリー（二二四年没）Ibn Shihab al-Zuhri ②ウカイル=ビン=ハーリド（?）‘Uqayl b. Khalid ③ライス（二七五年没）al-Layth b. Sa‘d ④ヤフヤー=ビン=アブドゥッラー（二二一年没）Yahya b. ‘Abd Allah b. Bukayr およびアブドゥッラー=ビン=サーリフ（二二三年没）‘Abd Allah b. Salih ①のズフリーはマホメットの傳記に關する傳承を集成した學者でイスラム百科辭典も彼に一項をもうけておりここで言及する必要はないであらう。②のウカイルは、イブン=サード（二三〇年没）によれば^⑨、ズフリーと同世代人である。タバリー（三二〇年没）は彼をズフリーの傳承を傳えたイスナードに一度だけ引用している。ズフリーの周圍に於いて彼の講義を筆記していた人物であらう。③のライスはメデynaに遊學したことのあるエジプトの傳承學者で、彼の集めた傳承は後世の學者によく引用される。イブン・イスハークとはほぼ同世代人である。④のヤフヤーについて古今の傳記學者は何も傳えてくれない。タバリーはライスの傳承を傳えたイスナードに一度、彼を引用している。^⑩ ライスの著書を筆寫した人物か。アブドゥッラー・ビン・サーリフはライスの弟子で師の著書を筆寫した學者である。テキストBは、ライスが②のウカイルのメモ（?）を通して得た①のズフリーの傳承が基であり、それを採録したライスの著書の

寫本からアブールウバイドが原著の『金の書』に書き移したもの、と推定される。なお、アブールウバイドは別の本にも『メディナ憲章』のテキストを採録しており、それをマムルーク朝時代の學者が利用しているが、アブールウバイドのその本は今日では失なわれている。

テキストCをのせているイブン・ザンジュヤフの『金の書』を、残念ながら、筆者はみていない。この『金の書』はナディーム(三七六年没)の『目録』にもみあたらず、近年のイスラム書誌學もこれを無視している。ハミドウッラーはこの書の寫本をトルコのブルドゥル Budur で發見し、そこにある『メディナ憲章』のテキストを校訂している。いまは、筆者はハミドウッラーの校訂を全面的に信頼しておく。ハミドウッラーによれば、テキストCにはイブンシハープ(ズフリー)にまでさかのぼるイスナードがあるという。ズフリーから著者であるイブンザンジュヤフに至る傳承の経路はここでは不明である。

著者イブン・ザンジュヤフについても古典的な傳記學者はその傳記を傳えない。ただ、エジプトのアスカラーニー(七七七年没)によれば、彼はライスやアブールウバイドの傳えた傳承を集めた學者だという。^⑧だとすれば、テキストCはズフリーからライスが得、そしてアブールウバイドが原著に採録したテキストBと同系統のイスナードをもつと推定される。そして、テキストBとCは、若干の字句の相違と節の出入りがあるが、ほぼ同一である。

マムルーク朝時代にマホメット傳を著したイブンサイッドナース(七三四年没)はイブンハークのテキストAを引用したあと、イブンアビーハイサマ(二七九年没)も同様のテキストを傳えていると注記している。^⑨おそらく、今日では失なわれたが、當時の西方世界では權威ある歴史書とみなされていたイブンアビーハイサマ著の『歴史の書』に『メディナ憲章』が採録されていたのであろう。^⑩イブンサイッドナースによれば、そこにはイスナードが明記されていた、といい、彼はそれを紹介している。イブンアビーハイサマの傳えた、今はみることのできないテキストをDとしよう。イブンサイッドナースが紹介するテキストDのイスナードは以下である。^⑪カシルビンアブドゥッラービ

ン＝アムル (c.) Kathir b. 'Abd Allāh b. 'Amr がその父、そしてその祖父から、②イーサー＝ビン＝ユヌス (一八七年没) 'Isā b. Yunus' ③アフマド＝ビン＝ジャナブ (c.) Ahmad b. Janāb Abū al-Valid. ②のイーサーは、アスカラーニーによれば、傳承學者でイブン＝イスハークよりはやや新しい世代に屬している。③のアフマドについては古今の傳承學者はその傳記を傳えていない。タバリーは一度引用している。おそらく、②のイーサーの著者の寫本作成者であらう。テキストDはイーサーの著作からイブン＝アビー＝ハイサマが採録したものであらう。そのイーサーはカシールなるものからテキストを傳えられている。このカシール、ならびにその父アブドゥッラーについて、古今の傳記學者は沈黙している。ただ、タバリーは三度、ワーキディ (二〇八年没) は一度、カシールの祖父からカシールに至る同じイスナードの傳承を採用している。カシールの祖父アムルは、タバリーでは、アムル＝ビン＝アウフ＝アルムザニー 'Amr b. 'Awf al-Muzani とある。ワーキディは、イスナードの中で引用とは別に、マホメットのタブークへの遠征の際のエピソードの一つにアムルを登場させている。そこでもムザイナ部族の人 (アルムザニー) とある。イブン＝サードは、バドルの戦の參戰者の傳記を集めた『大タバカ集』第三卷にはアムルを含めず、第四卷で彼を極く簡単に紹介している。④。ここではアムルはヤマンの人でアーミル＝ビン＝ルアイイ家の同盟者 (ハリーフ) とされている。ジローームが紹介しているムーサー＝ビン＝ウクバ (一四一年没) の『マガージ』の寫本の斷片にある一つの傳承のイスナードではズフリーがアムル＝ビン＝アウフを引いており、その注記としてアムルはアーミル＝ビン＝ルアイイ家の同盟者でバドルの戦の參戰者となる。⑤。アムル＝ビン＝アウフなる人物はマホメットの教友ではあるが、その傳記もよく傳わらない程度の影響力のない人物であったようである。そのアムルから孫に傳わった傳承は、まれに斷片的に歴史書に採用されているが、一級の傳承経路とはみなされていない。たに達しない。

テキストDのイスナードは、いままできたように決して第一級のものではない。しかし、『メディナ憲章』がズフリーとは關係のないイスナードで後世に傳えられていたという事實は重要である。嶋田教授は、テキストBがズフリーにさか

のぼるイスナードをもち、かつズフリーはテキストAを傳えたイブン・イスハークの師であるのであるから、テキストAもズフリーの傳承が基になっているに違いないと判斷されたが、ズフリーとは關係のないイスナードが存在する以上そうとはかぎらない。イブン・サイッド・ナースはテキストDはAと同様のものと判斷してあえてDの内容を採録していない。したがってテキストAはDと同系統のものである可能性もある。もつともテキストB・Cのイスナードはズフリーでとまっていた、ズフリーがどこから『メディナ憲章』のテキストを手に入れたか不明である。そして、ズフリーはDテキストを傳えたアムル・ビン・アウフの別の傳承を引用している例のあることは、先のムーサー・ビン・ウクバの『マギー』のところで指摘した。案外、B・Cテキストの基もアムルの傳承であつたかもしれない。

以上を改めて整理しなすと、『メディナ憲章』のテキストを後世に傳えたのは現在わかる限りでは次の四書である。

(1)イブン・イスハークの『預言者の傳記』(A)、(2)アブー・ウバイドの『金の書』(B)、(3)イブン・ザンジュヤフの『金の書』(C)、(4)イブン・アビー・ハイサマの『歴史の書』(D)。そしてAはマトンがあつてイスナードはない。Bはマトンとズフリーまでさかのぼるイスナードがある。CはBと同系統のものである。Dはマトンは失なわれたが、Bとは異なり、イーサーを経てマホメットの教友アムルにまでさかのぼるイスナードがある。

III

『メディナ憲章』は、ワットやサージェントが考えていたこととは違って、イブン・イスハークだけが傳えたものではなく、またイスナードがすべて失なわれたわけでもなかった。しかし、タバリーやワーキディーのような歴史家やいわゆる六大傳承集を編纂した傳承學者は『メディナ憲章』のテキストを自著の書物に採録していない。彼らはみなイブン・イスハークの『預言者の傳記』が傳えるさまざまな傳承を引用している。また、タバリーやワーキディーはテキストDのイスナードで傳わつた別な傳承を、わずかな例とはいえ、採用している。テキストBを傳えたライスの著作も、今日では失

なわれたが、彼らの時代には利用可能であったはずである。彼らが『メディナ憲章』のテキストを採用しなかったのは、それを知らなかったからではなく、知っていてあえて棄てたと考えるのが自然であろう。今日、『メディナ憲章』のテキストを読むイスラム學者は、それがマホメットの時代の社會を知る重要な史料であると判断する。昔日の學者にとってもそれは無視してはならない「傳承」であつたはずである。そして、實は、彼らはそれを無視したのではなかったのである。

タバリーの『預言者と王の歴史』の紀元二年の條の最後に次のような簡単な記事がある。「一説にいう。この年、神の使徒は血の代償 *al-ma'qil* (に^②い^②) 文書を作つた *katāba*。 (その文書は) 彼の刀に懸られていた *kāna mu'allagan bi-sayfih*」^② 先にも少し觸れたように、『メディナ憲章』の第一の主要な部分はムハージールンとアンサールの各集團間にあつた血の貸借および捕虜の身代金の清算に關することである。マホメットが「血の代償 (に^②い^②) 文書を作つた」と記したタバリーは、ここで、『メディナ憲章』の一部を念頭においていたに違いない。しかし、彼は『憲章』のテキストを無視し、また「一説にいう」と記してイスナードをあえてあげない。

タバリーの記事にある「(この文書は) 彼 (マホメット) の刀に懸られていた」とある一句は興味深い。カエターニーは、この記事の注として、アリーがマホメットが作つた重要文書を刀の鞘におさめていたという傳承を紹介している。サージエントは、タバリーの記事もカエターニーの注も参照していないが、このアリーがもっていた重要文書について論及する。^③ サージエントは、六大傳承集のすべてにアリーのこの傳承がおさめられていることを指摘し、アリーがもっていた重要文書は『メディナ憲章』そのものであつたと考える。彼はまた、その文書はアリー家に代々傳わり、アブドゥラーヒビン・ハサン・ビン・ハサン・ビン・アリー (一四四年没) が保持していた文書をテキスト A を傳えたイブン・ヌリス・ハークがみせてもらったのではないかと推定した。サージエント自身の南アラビアでの調査では、部族間の契約文書を、契約にサインしたものが、その刀の鞘におさめる風習があるという。そして、そのような契約文書は、しばしば、日付の異なるいくつかの文書を合成したものである、ともいう。

イブン・イスハークのテキストAが、アリーの子孫で當時のアリー家の一つの流れの長であったアブドゥラーが保持していた文書のコピーであるか否かはここでは問わない。しかし、タバリーの記事にある「マホメットが文書を彼の刀に懸けていた」という記述と、アリーが「彼の刀の鞘に文書をおさめていた」という傳承とサージェントの觀察した今日での南アラビアでの風習とを考え合わせると、次のような考えが成立する。マホメットは『血の代償』に關する文書を作成し、それを今日で部族間の契約文書を保持するのと同様の方法で、彼の刀のしかるべきところにおさめて常時持ち歩いていた。マホメットの死後、「マホメット家」の後繼者となったアリーがその文書を引き繼ぎ、同様に、刀の鞘におさめて常時携帯していた、と。アブー・ダーウド（二七五年没）の傳承集にある傳承では、アリーはこの文書を『コーラン』と並ぶ重要なものと考えていたようである。タバリーはこのアリーに關する傳承を承知したうえで、あえて、『血の代償』に關する文書をマホメットが「刀に懸けていた」という傳承を採用した、と考えて大過あるまい。タバリーはこの文書が「重要な文書であることは認識していたのである」。

傳承集の傳えるいくつかの傳承は『文書』はムハージルーンとアンサールの間に結ばれた契約である、としている。マムルーク朝時代のシリアの歴史家イブン・カシール（七七四年没）の年代記は、イブン・イスハークのテキストAを引用しているが、その引用の前記としてそのような傳承を紹介している。そのうち、イブン・ハンバル（二四一年没）の傳承集にある傳承は以下のである。「預言者は、ムハージルーンとアンサールの間に、彼らが彼らの血の代償を支拂い、ムスリムの間にある正義と秩序とにのっとり捕虜の身代金を支拂うことに關する文書を書いた。」この傳承も、間違ひなく、『メディナ憲章』の最初の部分を指している。同様な傳承がムスリム（二六一年没）の傳承集にもあることをイブン・カシールが紹介している。それは「預言者はすべての集團 *ba'in* に血の代償があることを書いた」という。

六大傳承集すべてにある傳承として「アナス・ビン・マールイクの家で、マホメットはムハージルーンとアンサールの間に同盟を結んだ *halafa*」というものがある。これも『メディナ憲章』を指しているとみて間違ひない。イブン・アシール

(六〇六年没、マジッドウッディーン) も同様の傳承を傳えているが、その傳承では同盟は二度あった、とある。^④一度はムハージルーンとアンサールを兄弟とし *akhaya*、もう一度は暫い合した *ahada*、という。イブン・イスハークは、『メディナ憲章』のテキストの直後に、ムハージルーンとアンサールの個々人を兄弟としたマホメットの政策を紹介している。また他のマホメット傳もこの兄弟關係の成立について多かれ少なかれ觸れている。サージェントは、イブン・アシールのこの傳承を引用して、この二度の同盟は兩者とも『メディナ憲章』をさしていると考えた。彼は『憲章』の『血の代償』に關する規定とそれにつづく一連の諸規定を二つの文書の合成と考えたため、二度の同盟を彼の考えた二つの文書と重ねて理解したのである。筆者は、後に述べるように、『憲章』の最初の部分を二つに分けるサージェントに賛成する。しかし、イブン・アシールの傳承をそれに重ねる必要はないと思う。この傳承は、イブン・イスハークらが傳える『兄弟關係』と『メディナ憲章』の二つを念頭においてつくられたもの、と考えるのが自然であろう。

以上検討したように、傳承集の著者やタバリーは『メディナ憲章』のすべてを棄てたわけではなかった。イブン・イスハークは、テキストの前に、自分の言葉として次のように言っている。「神の使徒はムハージルーンとアンサールの間に文書を書き、その中でユダヤ教徒と契約し、彼らの宗教と財産を保障し、彼らの義務を明らかにした。」ところがタバリーや傳承集の著者はムハージルーンとアンサールの間に書かれた文書(または同盟)、あるいは『血の代償』に關する文書について言及する時、ユダヤ教徒に關することには一言も言及しない。彼らは、イブン・イスハークや他のテキスト B・C・D を採用した學者とは違って、『メディナ憲章』のテキストを傳えた傳承を「疑しきもの」として棄て、他の傳承を「より正しきもの」と判斷して自著の書に採用したのである。

IV

『メディナ憲章』のテキストは同じ内容の條項がいくつか重複している。ワットはその事實に注目して『憲章』のテキ

ストはいくつかの文書を合成したものではないかと疑った。サージエントはテキストの形式が現在の南アラビアの部族間の契約文書に類似していることに注目し、明らかに文書の結びの句とみなしうるものが『憲章』のテキストに何度もみられることを指摘した。ワットもサージエントもテキストAしか検討していないことは先に指摘した。しかし、テキストB・Cをも比較して検討してもテキストが合成されたものであるという疑いは消えない。そこで、テキストはいくつかの日付けの異なる文書を合成したものである、と假定してテキストの内容を検討してみよう。そしてその検討は假定が正しいことを証明するであらう。

テキストの(1)條から(2)條までは一連の條項である。それは「これは、神の使徒、預言者マホメットが信徒およびクライシュ部族とヤスリブの民で神を信じる者および彼らに従う者、彼らと共にいる者、彼らに縁のある者、彼らと共に戦う者の間に(與えた)文書である」という前文に始まり、「お前たちの間で何か(この文書の條項の解釋に關して)意見が異なる場合は、その決定は神とその使徒に屬する」で終る。サージエントはこの最後の句の形式は部族間の契約の末尾の句に用いられる形式とまったく同じであるという。十分に説得力のある意見である。サージエントはこの一連の條項も二つの文書の合成とみる。(2)條までが最初の契約で(2)以下はそれに後に付加された條項とみなす。(2)條は「神を畏れる信徒はより良きより正しき立場にいる」という句で終る。この句が「文書」の末尾にくる常套句であるとの主張はあまり説得力はない。しかし、(2)條以下は(2)條までと比べると性格がやや異なる。それ故、まず(2)條までを検討してみよう。前文から(2)條までを『文書I』としておく。

『文書I』の主題は血の貸借と捕虜の身代金に關する規定で、そこに「信徒」が遵守しなければならない一般的・原則的な規定が加わっている。前に譯出した前文につづいて(1)條では前文にあげられた人々は一つの社會Uwunmaを成すとある。(2)條は「クライシュ部族のムハーシルーン(移住者)は血の代償の單位であり、彼らは共同で血の代償を支拂う。彼らは信徒のもつ友情と正義をもって彼らの捕虜を買いもどす」と規定する。血の代償とは、説明するまでもなく、

「眼には眼を、齒には齒を、命には命を」の同害同報を原則とする社會にあって、殺人の被害者の親族が加害者を殺害する權利・義務を金品で償うことである。(3)條以下(10)條まではメディナの民の8つの集團の各々が血の代償の單位であり、各々の集團内の下位集團が捕虜を買いもどす、と規定する。さらに(1)條では仲間で身代金や血の代償の支拂いに困っている者を見棄てず援助するようすすめる。

(3)條から(10)條までに名前のあがっている8つのメディナの民の集團の性格について、筆者は別稿で論及しておいた。^⑦その要點は以下である。この8つの集團は、當時のメディナの政治情勢や社會生活の實態をそのまま反映したものではない。メディナの住民は永年にわたり内戦を繰り返した、その過程で政治生活・社會生活の單位集團間に血の貸借が積み重なり、また多くの單位集團自體が集合離散を繰り返した。メディナの住民はその内戦の調停者としてマホメットを迎えたのであるが、内戦の調停とは、具體的には積み重なった血の貸借と捕虜の貸借の清算であつたはずである。清算のためには基礎になる單位を確定しなければならない。マホメットがメディナの住民の指導部分と合意の基に設定したのが『憲章』の8つの集團であつたと思われる。8つの集團は現實の政治集團・社會集團なのではなく、血の貸借の清算のために設定された、いわば、帳簿上の集團なのである。以上が8つの集團に關して別稿で述べた筆者の意見である。

(10)條までは、マホメットとムハージルーンを迎えたメディナの住民が内戦を停止し、積み重ねてきた血の貸借を清算し、これからは一つにまとまって仲良くしていこうと誓った誓いを文書化したものである。このような誓いをした人々はマホメットとムハージルーンおよびアンサールとよばれたメディナ住民の「信徒」であつた。前文は、「信徒」のみならず「彼らに従う者、彼らと共にいる者、彼らと縁のある者、彼らと共に戦う者」も『憲章』は對象にしていることを述べている。しかし、(1)條は「信徒」を對象にした規定であり、明らかに、(1)條までと一連の規定である(2)條以下の規定も、一つの例外を除いて、みな「信徒」を對象にしている。したがって『文書I』に合意し、おそらくサインしたのであろう人々は「信徒」が中心であつたに違いない。

『文書Ⅰ』が成立した正確な日付けを明示する史料はない。先に引用したタバリーの「マホメットが血の代償に關する文書を書いた」という記事は紀元二年のこととされている。この日付けは、おそらく、タバリー自身の推定であろう。しかし、血の貸借の清算こそがメディナの民がマホメットを迎えた最大の理由であるなら、その清算に合意した文書はヒジュラ後の非常に早い時期に成立するのが當然であろう。タバリーの推定した日付けが事實と大きく違っている可能性は少ない。このヒジュラの後まもない時期では、メディナの住民のうち「信徒」は多數派ではなかったと想定される。そして血の代償と捕虜の身代金の清算を集團名を擧げて規定した『憲章』の(2)條から(10)條の條項では、清算するのは「信徒」に限られていない。(3)條を譯出してみると以下である。「バヌー・アウフは血の代償の單位であり、血の代償を共同で支拂う。その各支族は信徒のもつ友情と正義をもって彼らの捕虜を買いもどす。」この條項が規定しているのは、バヌー・アウフに屬する「信徒」が血の代償に責任をもつのではなく、「信徒」ではない人々をも含めたバヌー・アウフの全成員が血の代償の責任を持ち、バヌー・アウフという集團の中にある下位集團の各々の全成員が捕虜の買いもどしの責任を持つのである。「信徒の間にある友情と正義」という一句は、決して、「信徒」のみが捕虜の買いもどしの責任をもつとの理解を導く句ではない。

『文書Ⅰ』は、全體の構成からみて、明らかに「信徒」間の契約である。しかし、この契約は血の代償の清算・捕虜の買いもどしという點では「信徒」ではないメディナの民をも拘束し、また現實にそのようにして清算が實行されたと考えられる。メディナの民のなかでマホメットと事前に接觸し、彼の説く宗教を受け入れ、彼を預言者と認め、彼をメディナに招いた一群の人々、すなわちアンサールがマホメットとの間に合意した血の貸借の清算方法が「信徒」ではない人々をも含めて現實に實施され、それが内戦狀態を終結できずにいたメディナ社會に平和をもたらした。そのような政治の一齣を『文書Ⅰ』は如實に反映していると筆者は考える。

『憲章』の前文から(1)條まではテキストAとB・Cの間に、多少の字句の相違はあっても、ほとんど同一である。(10)條

以下も、明らかに一連のものであるが、テキストの間に若干の差がある。まず(12)條をテキストBは缺いている。また(13)條の前半はテキストB・Cにない。(13)條の前半は「神の保護 (Sinn-dhimma)」の一つであり、彼ら(信徒)のなかの一人が與えた鄰人の保護は他のすべての(信徒)も守らなければならない」という文章である。この文章を缺くテキストB・Cでは(14)條と(15)條は一つの條項として理解される。すなわち、それは「信徒は信徒でない者のために信徒を殺さない。信徒は他の信徒に對立して信徒でないものを援けない(14)條。信徒は他の人々とは別に、互いに保護者(あるいは被保護者 hawali)である(15)條後半)。」となる。

テキストBが缺いている(12)條については後に検討する。(13)條前半の條項は「鄰人の保護」に關することである。「憲章」では「鄰人の保護」に關する規定がいくつかある。後にも觸れるが、テキストB・Cは、(12)條を例外として、「鄰人の保護」に關する規定をすべて缺いている。(13)條前半の條項の缺如はその一環とみるべきで、傳承の過程で不注意にも記し忘れられたものではない。筆者は、「鄰人の保護」に關する諸規定はいつかある時期に『憲章』に付加されたもの、と考える。(13)條前半の條項もその時にここに挿入されたもので、元來の『文書I』にはなかったもの、と考える。したがって(14)條と(15)條後半は一つの條項と考える。それを(14)條としておこう。

テキストBにはない(12)條を除くと(13)條以下(15)條までの條項は、「信徒」が守らなければならない一般的かつ原則的な規定である。その内容は、悪い行爲をした人物には、彼が信徒の一人の息子であったとしても、全員で對決する(13)條、信徒は不信徒のために信徒を殺さず、また信徒仲間に反對して不信徒を援けず、互いに保護し合う(14)條、信徒に従うユダヤ教徒には友情と平安とを與える(15)條、信徒の平和は一つであり、勝手に平和同盟を結ばない(16)條、戦争の際は援け合う(17)條、戦いの際の負傷は必ず復讐し、信徒は正しい立場にいる(18)條、といったことである。

以上の『文書I』は、内戦状態にあったメディナ社會でまず積み重なってきた血の貸借を清算し平和をもたらし、今後は「信徒」は一つとなって援け合い、敵と戦おう、と誓った契約文書であることが理解できよう。未だ「信徒」になって

いないメディナの民もこの契約に暗黙の同意を与えていた。彼らをどう扱うかまでは『文書Ⅰ』は何も規定していない。マホメットや「信徒」にとってメディナの政治・社會集團は「信徒」によって代表される、と理解していたに違いない。むしろ、「信徒」ではない政治的有力者も多数いた。しかし、各集團は「信徒」をその代表にして内戦の終結に合意するという政治情勢が、一時、實現したのであった。メディナにはユダヤ教徒も多数いた。彼らも『文書Ⅰ』では具體的には扱われていない。60條に、彼らにも友情と平和がある、と簡単に記されているだけである。ユダヤ教徒はメディナの内戦には積極的に關與していなかった。それゆえに、ユダヤ教徒を含めずに内戦の終結が可能であったのである。

V

『憲章』の60條はテキストBに缺けていると述べた。それは「信徒は他の信徒のマウラーを、後者の信徒の同意なしに、ハリーフとはしない」という規定である。筆者は、別稿で、マウラーとハリーフの性格について詳細に論じた。^⑤そこで得た筆者の結論は、マウラーとはこの時代のメッカ・メディナ社會では奴隸身分から解放された解放奴隸を意味し彼らは依然として主人になかば隸屬していた人々であり、一方のハリーフは同盟者として血縁集團に受け入れられていた人々で彼らの多くは歸屬した集團と婚姻でかあるいは母系で縁つぎきであったのである。この『憲章』の規定は、ある信徒に隸屬している解放奴隸をその信徒に無斷で同盟者とし、隸屬狀態の解消を計ってはいけない、という意味の規定である。

『文書Ⅰ』の諸規定は、血の代償の單位集團を固有名で規定した條項を除けば、一般的・原則的な規定である。それらは、いわば、法の精神を文章化したものである。それに對して60條は、いわば、法の具體的な規定である。この法規定の背景に、ある信徒が他の信徒に隸屬する解放奴隸を勝手に自分の同盟者にしてしまった事件があったのではないかと容易に想像できる。

ハミドゥッラーはこの60條の注としてムスリムの傳承集とイブン・ハンバルの傳承集にある次の傳承を紹介している。

「神の使徒はすべての集團にその血の代償について書き與えた。それから信者（ムスリム）である人のマウラーをその信者の許可を得ず世話してはならないと書いた。」この傳承も、いわゆる六大傳承集の編者も『メディナ憲章』を決して無視はしていなかった一つの證據である。しかし、ここでより興味深いのは「血の代償」に關する文書と「マウラー」に關する文書が、一連のものではあるが分けて考えられている事實である。原文は、血の代償云々を「書いた *katāba*」、「そして *thumma*」マウラー云々を「書いた」とある。この傳承は(1)條は『文書Ⅰ』のオリジナルなものではなく、後にマホメット自身によって加えられた條項であることを示唆している。『文書Ⅰ』はテキストBがオリジナルに近い形をとどめており、Bに缺いてテキストAのみにある(2)條と(3)條前半はオリジナルな文書に後にマホメット自身の意志によって加えられたと筆者は考える。

(2)條以下(3)條までは『文書Ⅰ』とひとつづきのものであることは先に述べた。そして、サージェントはこれらの條項は『文書Ⅰ』に後に付け加えられたものと考えたことも紹介した。サージェントにならい、(2)條から(3)條までを『文書Ⅱ』としてみよう。『文書Ⅱ』はテキストAとB・C間に、細かな字句の相違はあつても、本質的な差はない。最後の(3)條は先に譯出したように、契約文書の末尾にくる形式をふまえた條項である。そこでは、意見の相違がある時は神とマホメットが決定する、とあるようにマホメットの指導的立場が明確にされている。サージェントはこのような立場を、部族の習慣法に長じ部族間の契約で契約内容に當事者間に意見の相違がでた際にそれに關する決定を下す役割をもつ現在の南アラビアのムッラド *murād* と同じである、と考えた。『文書Ⅰ』でメディナの民の血の賃借を清算するよう調停したマホメットは、『文書Ⅱ』では法の權威者として登場しているのである。しかも、彼は單なる權威者ではなく、立法者としての性格ももっていたことを『文書Ⅱ』の各條項が示唆している。

(2)條は、「偶像崇拜者はクライシュ部族の人や物に鄰人の保護を與えてはならない。また彼ら（偶像崇拜）は信徒と對立してクライシュ部族の人を援けてはいけない」と規定する。この條項も、(1)條と同じく、メディナの民の信徒ではない

部分がクライシシュ部族を公然と援助し、そのことがメディナ社會の政治問題となった事件がその背景にある、と想像される。この②條も、法の精神ではなく、法の具體的な規定である。そして、法の規制の対象が「信徒」ではなく「偶像崇拜者 muslim」であることが注目される。マホメットと「信徒」は未だ改宗していない人々をもその政治的指導下におくうとしていたことをこの條項は示している。そして、おそらく、それが可能であった時期にこの條項が成立した、と考えるべきであろう。

③條は「罪のない信徒を殺した者は、被害者の縁者が血の代償金で満足する場合以外は、報復されなければならない。信徒は、一體となり加害者に對決する」と規定する。『文書Ⅰ』の⑬條には、悪い行爲を行なった者には信徒全員で對決する、とあり、⑭條には、信徒は不信徒のために他の信徒を殺してはいけない、とある。『文書Ⅰ』のこの二つの規定と『文書Ⅱ』の②條は、内容の點で、重複する。しかし、『文書Ⅰ』はいわば原則であるのに反し、『文書Ⅱ』の規定は、やはり、ある殺人事件を背景に成立した具體的規定であると理解できる。

②條は以下である。「この憲章の内容を承認し、神と最後の審判の日を信ずる信者は、悪い行爲をした者を援けたり匿まったりしてはならない。云々。」この規定も、マホメットや「信徒」の指導部分の意志に反して、「悪人」を匿まう、あるいは②條の殺人事件の加害者かもしれないが、という事件を背景におくことが可能であろう。「この憲章の内容を承認した信者」という表現は興味深い。『憲章』と譯した言葉はサヒーフ・アル・ash-shifaで、紙片、ページという意味の言葉である。むろん、この時代のアラビア半島に紙があるはずもなく、ここでは、おそらく、羊皮紙を意味していたであろう。この言葉は『憲章』が文書となっていたことを意味し、文書となっていた『憲章』がマホメットをして人々を指導させた有力な道具であったことを示している。タバリーの傳えるように、マホメットがこの『憲章』を刀の（鞘）に納めていた理由もここにあった。内戦調停に人々が同意した文書は、政治の次の舞臺では、調停者の政治指導性を支える武器になったのである。

『文書Ⅱ』は、以上のように、法の具體的な規定であり、明らかに、テキストBの傳える『文書Ⅰ』とは内容の性格を異にしている。ここではマホメットは「法」の權威者であり、立法者である。それ故、『文書Ⅱ』を『文書Ⅰ』と分けて考えたサージェントの意見に筆者は賛成する。『文書Ⅱ』は、マホメットの立場が内戦調停のために迎えられた調停者の立場からメディナでの政治の指導者のそれへと變化してから『文書Ⅰ』に加えられたもの、と筆者は考える。それは、疑いなく、バドルの戦の後のことであらう。

VI

『憲章』の24條から29條まではユダヤ教徒に関する規定である。このうち、かなりの部分はテキストB・Cにない。テキストA・B・Cに共通する部分を『文書Ⅲ』とし、テキストAにしかみられない部分を『文書Ⅳ』としよう。

『文書Ⅲ』の冒頭にある24條は以下である。「ユダヤ教徒は、戦いの續くあいだ、戦費を信徒と共に負擔する。」そして25條は、「バヌーリアウフのユダヤ教徒は、信徒とは別の一つの社會(ウシマ)である。ユダヤ教徒の宗教は彼らのものであり、信徒の宗教は彼らのものであり、そのことは彼ら自身にも彼らのマワリーにも當てはまる。云々。」とある。そして26條以下は各集團のユダヤ教徒はバヌーリアウフのユダヤ教徒と同じである、と規定されている。『文書Ⅲ』の主旨は明らかで、それは、ユダヤ教徒の信仰を容認し、彼らに戦費を負擔させることである。

『文書Ⅲ』のユダヤ教徒はバヌーリアウフ以下六つの集團にいるユダヤ教徒と表現されている。この六つの集團は『文書Ⅰ』で血の代償の單位であつた八つのメディナの民の集團のうちの六つなのである。すなわち、この六つの集團はユダヤ教徒の集團なのではなく、「信徒」が政治的代表者である集團に屬するユダヤ教徒である。種々のマホメット傳や年代記は、メディナに三つのユダヤ教徒の集團があつたことを我々に教えてくれる。それは、カイヌカーア、ナディール、クライザの三部族で、マホメットは二年十月にカイヌカーア部族をメディナから追放し、四年三月にナディール部族を同様

に追放し、五年十二月にクライザ部族を撲滅した。『文書Ⅲ』は、しかし、この三部族に言及しない。

バラズリーにつきのような記事がある。「諸傳承は言う。神の使徒がメディナに到着した時、彼とヤスリブのユダヤ教徒の間に文書を書き條約（アフド、*afud*）を結んだ。この條約を最初に破棄したのはカイヌカーア部族のユダヤ教徒であり、神の使徒は彼らを追放した。」サージェントはこの記事を誤解して、この條約を『文書Ⅰ・Ⅱ』を指すと理解したが、これは明らかにユダヤ教徒とだけの條約を指しており、このバラズリーの記事自体はアンサールについて何も言及していない。バラズリーは、ここでは『文書Ⅲ』について述べたのではなく、カイヌカーア部族や他のユダヤ教徒の集團とマホメットの間で結ばれた條約を語っている。ワーキディーも、クライザ部族の男をイスナードの最初にもつ、似た傳承を傳えている。ワーキディーはまたクライザ部族包圍戰の際の一つのエピソードとして、マホメットがメディナに來た時に結ばれた契約文書をクライザ部族のリーダーがこの時まで保持していたことを傳えている。これらの傳承は、マホメットは、『文書Ⅲ』とは別に、ユダヤ教徒と何らかの條約を結び、それが文書化していたことを傳えている。

マホメットがユダヤ教徒との間に「文書」を作成したとして不自然ではない。彼は外交交渉をもった集團との間に「文書」を作成することが多かった。おそらく、これらの傳承の語るユダヤ教徒との間の「文書」は歴史的事實であろう。しかし、その「文書」は、その作成後の現實の政治過程のなかで無効となった。ユダヤ教徒の主要な三部族が追放ないしは撲滅された後にもユダヤ教徒はメディナに存在したことを示す傳承もある。『文書Ⅲ』は三部族とは關係のないユダヤ教徒に関するものである、と筆者は考えている。

『文書Ⅳ』は、その筆者の考えが正しいことを示唆している。③條は、「バヌー・サーラバはバヌー・アウフのユダヤ教徒に關することと同じである」と規定し、④條は、「サーラバの支族ジャフナ家も彼らと同じである」、とし、④條は、「サーラバのマワリーは彼らと同じである」とする。③條と④條については後述する。すなわち、『文書Ⅳ』の主題はサーラバ部族に關する規定である。この集團は、既に指摘されているように、ユダヤ教徒の集團である。テキストB・C

がこの『文書Ⅳ』を缺いている事實は、『文書Ⅳ』は『文書Ⅲ』とは別に契約され、後日一つにまとめられたことを示唆している。マホメットとサーラバ部族との間の文書が存在した、という事實は、他の三部族との間にも文書があったことを示している。『文書Ⅲ』のメディナの民の各集團内のユダヤ教徒という表現のなかにユダヤ教徒の三部族も含まれる、と考えた學者もいるが、より小さな集團であつたと推定されるサーラバ部族が固有名で『憲章』に登場している以上、そのような考えは不自然である。

『文書Ⅲ・Ⅳ』がテキストAのような形にまとめられたのは三部族のうち最後に残ったクライザ部族が撲滅された後のことと推定される。それまでは別な契約が效力をもっていたはずである。おそらく『文書Ⅲ』はかなり早い時期に成立し、三部族がメディナから消えた後に、残ったサーラバ部族に関する『文書Ⅳ』が『文書Ⅲ』に付加されたのであらう。

『文書Ⅳ』には、先に指摘したように、⁶³條と⁶⁴條ともある。⁶³は「ユダヤ教徒のビターナ bitāna も彼らと同じである」という規定で、あきらかに、他の條項と一つづきの條項であるが、ビターナの具體的内容を知る手がかりが何もない。⁶⁴條のマワリーとは別な身分の人々であることは、両者が並列されている以上間違いないが、それ以上のことは何もわからない。⁶³條は「バヌー=シュタイバ Shuṭayba はバヌー=アウフのユダヤ教徒に關することと同じである」と規定する。文章の流れからみて、⁶³條が『文書Ⅳ』に最初からあつたのなら、「バヌー=アウフ云々と同じ」とはならず、「彼らと同じである」となるのが自然である。テキストB・Cは「バヌー=シュトバ Shuṭba」をジャフナの支族として⁶⁴條に入れている。ジャフナとは⁶²條のサーラバ部族の支族である。サーラバ部族はジャフナという支族を内部にもち、さらにそのジャフナ氏族はシュトバ(シュタイバ)という集團を内部にもっていたことになる。

(46)條は「この憲章の民」に關する諸規定のなかにはさまったユダヤ教徒に關する規定である。テキストB・Cではそれは「アウスのユダヤ教徒は、彼らのマワリーも彼ら自身も、憲章の民の正義と譽れと共にある。バヌー=シュトバはジャフナの支族である」とある。この「憲章の民」に關する諸規定を『文書Ⅵ』とする。『文書Ⅵ』の成立の際、アウスの

ユダヤ教徒が問題であつたに違いない。この「アウスのユダヤ教徒」について様々な議論がある。筆者はこれをサーラバ部族と考えたい。『文書Ⅵ』の成立は後に述べるように、クライザ部族追放後のことと推定される。サーラバ部族とマホメットとの間には、當然、それ以前から契約があつたに違いない。それは、おそらく、『文書Ⅳ』の基本となつた文書であらう。それが、『文書Ⅵ』作成の際に④條の形でそこに含まれ、『文書Ⅳ』と『Ⅵ』が合成された際、両方とも残つてしまつた、と筆者は考える。

『文書Ⅲ』および『文書Ⅳ』は、メディナのユダヤ教徒についての貴重な資料である。マホメットはユダヤ教徒の三部族を追放・撲滅したが、その他のユダヤ教徒も、少なからず、メディナに残存していたのである。彼らのある者はアンサールの各集團に含まれる形で、またある者はいく層もの集團を形づくつて存在した。彼らはまたマワリーーという隷屬民を従えてもいた。マホメットは彼らに戦費を負担させ、その安全を『文書』で保障していた。『文書Ⅲ』『文書Ⅳ』はそのような現實の政治の反映である、と筆者は考える。

VII

『憲章』の③條から③條は解釋がむづかしい。③條は『文書Ⅲ』の②④條とまったく同文である。これはテキストB・Cに缺けている。また③條の冒頭の句、「ユダヤ教徒の支出は彼らで負擔し、ムスリムの支出は彼らで負擔する」、もB・Cは缺いている。テキストAのこの三條を『文書Ⅴ』とすると、これは、明らかに、ユダヤ教徒に關する規定で、『文書Ⅲ・Ⅳ』と一連のものである。しかし、テキストB・Cはユダヤ教徒という言葉が一切でてこない。それを譯出すると以下である、「彼らはマホメットの許可なしには戦いにでかけない。彼らの間には、憲章の民に戦いを賣る者に對して援けがある。不正に扱われた者には友情と援けを與える。」この文章では、「彼ら」はユダヤ教徒を指すとは限らない。むしろ、次の條から始まる「憲章の民」と理解しうる。これまで述べてきたことから明らかなように、テキストB・Cはテキスト

Aよりも古い形の『憲章』を傳えている。B・Cテキストに新條項を加えてAテキストが成立したようである。『文書V』のオリジナルはテキストB・Cの形で『文書VI』の一部としてあり、『文書IV』が『文書VI』と合成された際に、双方の一部づつが混って、テキストAにある形の『文書V』ができたのではないかと、筆者は疑う。しかし、筆者に自信はない。

VIII

『文書VI』は、すでに指摘したように、「憲章の民」に関する規定である。68條から70條までがそれであるが、そのうち、40條、41條、43條の三條は鄰人の保護に関する規定でテキストB・Cに缺いていることはすでに述べた。また最後の條である70條の結びの句、「神は、譽れ高き者と神を畏れる者の『保護された鄰人』である」、もテキストB・Cは缺いている。そして、これらの條項中に「憲章の民」という言葉はない。したがって、これらの條項は『文書VI』のオリジナルなものにはなかった、と筆者は考える。これらの條項は『文書I』に後に付加されたと考えられる「鄰人の保護」に関する規定と共に『文書VII』を形成する。『文書VII』は、ある時期に、『憲章』に書き加えられたのであろう。

「憲章の民」と譯出した言葉はアフルール・サヒーフ・ahl al-shi'faである。『文書II』の72條に「この憲章の内容を承認し云々の信者」という言葉はある。しかし、先にも強調したように『文書I・II』はあくまで「信者」に関する規定である。一方、『文書VI』は「信者」を對象とせず「憲章の民」を相手にしている。『文書VI』は、明らかに、『文書I・II』と性格を異にしている。この両者が同時に成立した同一の文書の部分であると理解するのは無理である。

『文書VI』の冒頭である69條は以下である。「ヤスリブの内側は憲章の民の聖域である。」聖域ハラム harām については、筆者は別稿で觸れた⁴⁰。聖域とはそこの流血の禁じられた地域をいう。むろん、聖域であるかないかは聖域を守る人と無視する人との間の政治の力関係で定まる。イスラムにとってメッカとメディナは二大聖域である。しかし、メディナは、ヒジュラ後の最初から聖域であったわけがない。そこは、マホメットの指導下で暗殺・戦争がいくたびもあった

地域である。ユダヤ教徒の三部族をはじめとしてマホメットへの積極的反対派がメディナから消えた時、マホメットは安心してそこでの流血を禁じたに違いない。サージェントはサムフリーディーにある、メディナの聖域はハイバル遠征（七年一月）の後宣言された、という傳承を紹介している。^④メディナを追放されたユダヤ教徒のナデイル部族は、この遠征の結果、完全にマホメットに屈服した。またメッカとの和平も成立していた。このような時期にメディナの聖域が宣言されたとの傳承はまことに信憑性が高い。

④條は、「憲章の民の間に不幸をもたらすおそれのある事件がおきたら、（その解決）は神と預言者マホメットに委ねる、云々」とある。『文書Ⅱ』でマホメットは、『憲章』の解釋權を委ねられていた。『文書Ⅵ』ではマホメットは政治的な事件すべての決定權を與えられたのである。この一條は、マホメットのメディナでの政治的な立場が決定的に變化したことを如實に反映している。

④條は「ヤスリブを襲う者に對して、彼らの間には援けがある」という規定である。つづいて④條はユダヤ教徒と信徒の間の同盟に關する規定で④條は、先に紹介した、アウスのユダヤ教徒に關する規定である。サージェントはこの三條を獨立の文書と考え、このユダヤ教徒をクライザ部族と考えた。しかし、テキストB・Cの④條に「バヌーシシュトバはジャフナの支族である」と斷っている以上、④條のユダヤ教徒はサーラバ部族と考えるのが自然である。バヌーシシュトバ（シュタイバ）は、おそらく、サーラバ部族やその支族であるジャフナの大部分の人々とは別な集團を形づくって、別な場所に住んでいたのではないかと想像される。

『文書Ⅵ』の成立した時期、すなわち、七年の頃には、メディナの民の大部分は「信徒」であつた。「憲章の民」とは彼ら「信徒」と彼らに従屬する若干のユダヤ教徒を指していたに違いない。マホメットは「憲章の民」の絶對的指導者となつてゐた。ただ、この時期のメディナ社會の例外的存在がユダヤ教徒のサーラバ部族とその支族であつた。④條と④條はその例外に對する規定である、と筆者は理解する。したがつて④條の「彼ら」とは「憲章の民」を指す、と考える。

『文書Ⅵ』は次の句で終る。それは『メディナ憲章』の結びの句でもある。「名譽は裏切の前にある。惡を欲する者は彼自身のためにしかそれを得ることはできない。神は『憲章』の最も正しいそして最も譽れ高い實行者である。『憲章』は惡人や裏切者のためにあるのではない。惡人が裏切者でない限り、行く者にも停まる者にも安全は保障される。」

IX

以上述べてきたように、『憲章』のテキストの全文は傳えないが『憲章』に言及する諸傳承も、テキストの内容自体も、テキストは合成されたものであることを示している。それは、マホメットのヒジュラ後の非常に早い時期からヒジュラ後七年にまでわたる時期に何回か改定され新條項を加えていった『文書』である。この『文書』はマホメットがメディナを支配するための「武器」であった。また、『文書』はマホメットの政治と當時のメディナ社會に關して生きた情報を我々に教えてくれる。それによれば、「マホメットはヒジュラ後『ウンマ』という教團國家をつくろうとしていた」とする従来の通説は疑問とされなければならない。しかし、マホメットの政治とメディナ社會に關して詳述することは本稿の目的ではない。

『メディナ憲章』にあるいくつかの言葉は嚴密に考察されなければならない。ウンマ、信徒(ムーシン *muṣlin*)、ムスリム、預言者、神の使徒、ヤスリブ、メディナ、等々である。殘念ながら、本稿に與えられた紙數はすでに盡きた。稿を改めてこれらを考察しよう。

最後に、次の事實にだけ言及しておきたい。『メディナ憲章』のなかのいくつかの條項は法の具體的な規定である。マホメットは、神の啓示だけではなく、人々と合意しそれを文書化するという手段で「立法」していた。しかし、そのような「法」は、實に興味深いことに、後世のイスラム法の法源になることはなかった。

註

- ① Ibn Hishām : *Kitāb Sirā Rasāl Allāh*, (ed., F. Wüstenfeld), Göttingen, 1859—60, pp. 341—344.
- ② W. M. Watt : *Muhammad at Medina*, Oxford, 1956, pp. 221—228.
- ③ R. B. Serjeant : “The Constitution of Medina”, *Islamic Culture*, vol. 8, 1964, pp. 3—16.
- ④ 鹽田藤牛『預臣類考』角川書店 昭和四十一年九月—九月八日。
- ⑤ Abū Ubayd al-Qāsim b. Sallām : *Kitāb al-Amwal*, al-Qāhira, 1353 H, pp. 202—207.
- ⑥ M. Hamidullah : *Majmā'a al-Wahā'iq al-Siyāsiya*, 3rd ed., Bayrūt, 1969, pp. 39—47. なお、筆者は、史學會の六十九回大會（一九七一年）の「フホキマールの外交文書」と題する發表の本書を紹介した。（『史學雜誌』第八〇編十二號 八四頁參照）。
- ⑦ このような研究の優れた例として次の論文がある。
M. M. Bravmann : “The Community's Participation in the Punishment of Crime in Early Arab Society” in *The Spiritual Background of Early Islam*, Leiden, 1972, pp. 315—334.
- ⑧ Ibn Sa'd : *al-Ṭabaqāt al-Kubrā*, Bayrūt, 1957—58, vol. 7, p. 519.
- ⑨ Ibn Sa'd, vol. 7, p. 516; Ibn Khalīkān : *Wafayāt al-A'yān*, al-Qāhira, 1948, vol. 3, p. 280.
- ⑩ al-Ṭabarī : *Tarīkh al-Rasūl wa al-Mulūk*, (ed. M. J. De Goeje), Leiden, 1881—1882, vol. 1, p. 2139.
- ⑪ Ibn Sa'd, vol. 7, p. 518; al-Bukhārī : *Kitāb al-Tarīkh al-Kabr*, Ḥaydarābād, 1958—59, vol. 3, p. 121.
- ⑫ Ibn Kathīr : *al-Bidāya wa al-Nihāya*, Bayrūt, 1966, vol. 3, p. 226.
- ⑬ al-'Asqalānī, Ibn Ḥajar : *Tahdhīb al-Tahdhīb*, Bayrūt, n. p., 1967, vol. 3, pp. 41—42.
- ⑭ Ibn Sayyid al-Nās : *Uyūn al-Athar fī Funūn al-Maghazī wa al-Shamā'il wa al-Sir*, al-Qāhira, 1356H, vol. 1, pp. 197—198.
- ⑮ cf. *El*, n.e., “Ibn Abī Khaythama”
- ⑯ al-Ṭabarī, vol. 1, p. 1105, 1467, 2529; al-Wāqidī : *Kitāb al-Maghazī*, London, 1966, vol. 1, p. 40.
- ⑰ al-Wāqidī, vol. 3, p. 994.
- ⑱ Ibn Sa'd, vol. 4.
- ⑲ A. Guillaume : *The Life of Muhammad*, London, 1955, p. xlvii.
- ⑳ al-Ṭabarī, vol. 1, p. 1367.
- ㉑ L. Caetani : *Annali dell' Islam*, (rp.) Hidesheim, 1972, vol. 1, pp. 525—526.
- ㉒ サーチマンは資料の出典を具體的にあげていない。
「フホキマール家」のこの概念の成立について、筆者は稿を改めて述べておこう。
- ㉓ 筆者の現在の考えの概略は史學會第

七十四回大會で「カリフ制の成立とマホメット家」と題した發表で述べた。『史學雜誌』第八十五編第十二號、七三—四頁参照。

- ②④ cf. Serjeant, p. 5.
- ②⑤ Ibn Kathir, vol. 3, p. 224.
- ②⑥ cf. Serjeant, pp. 6—7.
- ②⑦ 拙稿「アラブ戰士集團の成立」、『歴史學研究』、三八二號（一九七二年）、一一—五頁。
- ②⑧ メディナの民（ユダヤ教徒を除く人々を指す）で戰士になりうる人数は二千人程度であつたのに對し、バドルの戦いに參戰した「信徒」は二百數十人であつた。
- ②⑨ ハミドゥッラーの校訂では、この條項をテキストCが缺いているとは注記していない。テキストBが缺いている他の條項はすべてテキストCも缺いている。注記がないのはミス・プリントかもしれない。
- ③⑩ この文章の原文は解釋しにくいものであるが、ここで譯出したような意味であらう。
- ③⑪ ⑩條の前半はテキストB・Cに缺く。
- ③⑫ 拙稿「イスラム勃興期のアラブ社會の構造——1——」、『イスラム世界』七（一九七〇年）、一五—三三頁。
- ③⑬ テキストAは「信徒と一緒の」とも解釋できるが、宗教は別々にと續く以上、「信徒とは別に」と理解すべきであらう。テキストB・Cは「明らかに」「別に」と表現している。
- ③⑭ al-Baladhri: *Kitab Futuh al-Buldan*, London, 1931, pp. 478—9.
- ③⑮ al-Waqidi, p. 176.
- ③⑯ *ibid.*, pp. 455—457 なお、イブン・ヒシャームもユダヤ教徒とマホメットとの間に文書が存在したことを伝えるエピソードをいくつか傳えているが、先學がすでに指摘しているので、あえてここでは觸れなかった。
- ③⑰ cf. Watt, pp. 216—217.
- ③⑱ 三部族以外のユダヤ教徒に關する史料は非常に少ない。筆者の考えが正しければ『文書Ⅲ』は、それに關する最良の史料となる。
- ③⑲ cf. Watt, p. 227.
- ④⑩ 拙稿「イスラム勃興期のアラブ社會の構造——2——」、『イスラム世界』第十一號（一九七六年）、一三—二六頁。
- ④⑪ al-Samhudi: *Kitab Wajaf al-Wajaf bi-Ahbar, Dar al-Musajafa*, n. p. 1326H, Vol. 1, pp. 77—8.

The “Constitution of Medina”

Akira Gotō

It is well known that Ibn Iḥāq handed down to us the so-called “Constitution of Medina” which was an agreement contracted between Prophet Muḥammad and people of Medina after the Hijra (emigration of Muḥammad to Medina). This document has already been studied by various Western scholars including W. M. Watt and R. B. Sergeant, both of whom suggest that it comprises several distinctly separate documents. The Ibn Iṣḥāq text was the only one available for these scholars, but it should be noted that other texts, different in some parts, are preserved in *Kitāb al-Amwāl* by Abū ‘Ubayda and also in unpublished manuscripts of a book by Ibn Zanjūyah. Furthermore, the *isnād* (but not the *maṭn*) of the Constitution transmitted by Ibn Abī Ḥaythama is also available. Most Muslim historians and traditionalists who quote many *ḥadīth* from Ibn Iṣḥāq do not cover the whole text in their books. Al-Ṭabarī, for example, describes a short but important account of only one part of the document, and Muslim historians and others also present only a few *ḥadīth* about some parts of the document. Considering all of the information now available, one may conclude that the original agreement was only the first part of the text; that is, the part concerning blood money, and that the other parts were added later.